

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26360065

研究課題名(和文) 日本の島における「新しい観光」：持続可能な観光発展の検討

研究課題名(英文) "New tourism" on Japanese islands: an analysis of the sustainability of tourism development

研究代表者

フンク カロリン (Funck, Carolin)

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：70271400

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の結果として、観光の発展が島にもたらす影響は一方向的なものではなく、島の社会的、環境的条件が観光の発展と観光におけるイノベーションに複雑に絡んでいることを明らかにした。また、持続可能な観光発展を目指す中で島外の行政機関、観光産業や移住者と島内ステークホルダーの利害関係が重要な鍵を握っていることが見えた。持続可能性を評価するときに、各島の状況に合わせた指標を選び、「外部」と「内部」の関係も検討することが不可欠である。

研究成果の概要(英文)：This research has shown that tourism development impacts islands not one-directionally. Rather, islands social and environmental conditions affect the way tourism develops and innovates in many ways, thus creating different development paths on each island. Furthermore, it became apparent that relations between actors from outside the islands, like administration, tourism industry or immigrants from other areas, and local stakeholders play a key role when aiming for sustainable tourism development. Therefore, indicators for the evaluation of sustainability need to be adjusted for each island and the connection between "inside" and "outside" also needs to be considered.

研究分野：人文地理学

キーワード：持続可能な観光 地域振興 島 日本

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術背景には、「持続可能な観光」、「島」、「イノベーション」という三つのキーワードが関連する。持続可能な観光があまり成功していないことも指摘されている。そこで本研究は環境・地域社会・地域経済の3つの視点から日本離島における観光の影響を分析し、持続可能な観光発展を科学的に設定された基準と、住民または観光者の認識と比較することにより新しい展開を目指す。

2. 研究の目的

日本の島は、現在、エコツーリズムやアート・ツーリズムなど「新しい観光」と言われている観光形態が普及して観光地化が進んでいる。その結果、人口流出に歯止めがかかるといふ利点がある一方で、自然の過剰利用、不安定な雇用、交通問題、島内コミュニティの変化など、様々な課題が指摘されており、観光資源の管理や観光産業の安定化を工夫する必要がある。そこで本研究は、第1に、観光化が日本の離島にもたらした変化を環境、社会文化、経済の3つの側面から分析し、その課題を明らかにする。その上で第2に観光資源の保全と活用、観光産業の発展を批判的に検討し、環境負荷を最小限に押さえ、地域住民に最大限の利益をもたらす持続可能な観光発展の方向性を検討する。

3. 研究の方法

本研究では計量的方法と質的方法を組み合わせる。

日本の島における観光発展の影響についての調査：先行研究による課題整理、事例地域の選定と聞き取り調査、土地利用、景観、人口、産業構成について既存資料からの変化把握

住民と観光者の認識調査：住民が観光発展による変化をどのように認識し、観光客が島の魅力と課題をどう認識するか、フォーカス・グループ調査、インタビュー、アンケートで把握

聞き取り調査に基づく観光に関連するアクターとその利害関係の分析

4. 研究成果

研究の論点や枠組みの検討：日本語、英語、ドイツ語の文献・資料を収集し、「島」という限られた空間における持続可能な観光、「新しい観光」と言われる観光形態と、観光分野におけるイノベーションに関連する研究の論点を整理した。持続可能性を計る指標のガイドブック (UNWTO 2004) を中心に、文献から観光発展による変化を計る基準や指標を把握し、日本の島で活用できる方法を検討した。

新しい観光と島についての検討 (1) : エコツーリズム : 屋久島 (鹿児島県)
エコツーリズムが盛んな屋久島 (鹿児島県)

について、2014年度に準備調査として観光産業関係者の意識調査を行った。その結果、エコツーリズムの概念について理解が回答者により異なっていること、観光発展について全体的に好意的に見られていること、ゴミや登山道の維持問題が意識されていることが確認された。続いて、行政、観光協会、住民団体に聞き取り調査を行い、屋久島の課題をまとめた。2015年度には準備調査と聞き取り調査の結果に基づいて博士課程後期の院生 (Adewumi Ifeoluwa B.) を中心に観光客、観光事業者、そして住民に対するアンケート調査を実施した。住民と観光事業者に対してはエコツーリズムの概念の理解や観光発展についての考えを把握し、観光客の場合、動機や満足度について把握した。屋久島における観光発展の持続性について全体的に評価するために指標を設定し、既存の統計資料と実施したアンケート結果で評価を行った。

新しい観光と島についての検討 (2) : サイクリング・ツーリズムと地域連携 : しまなみ海道沿いの島々 (愛媛県・広島県) , とびしま海道沿いの島々 (広島県・呉市)

2014年度にしまなみ海道で一般観光客と自転車利用者を対象にアンケート調査を実施し、また、宿泊施設とグリーン・ツーリズムに関わる農家に聞き取り調査を行った。一般観光客については、訪れる人が景色を楽しむこと、訪れた土地の料理特産物を楽しむこと、家族や友人と楽しく過ごすこと、リラックスすることを重視して旅をし、情報は知合いや口コミで得ることが多い。

結果を一つ詳しく紹介すると、しまなみ海道の魅力は何か、項目ごとに5段階の評価をつけてもらった。評価平均値をみると、「景色」に対する評価が4.7点と最も高く、次いで「海」が4.4点、そして「農産物、食べ物」が4.1点と続いた。観光客は、多島美に代表されるような、しまなみ海道の自然景観の美しさや、そこからうまれる農産物や食べ物に魅力を感じていることがわかった。また、項目別に評価値の割合をみると、およそ9割を超える人々が「景色」に対して肯定的であることがわかる。それに対して、「歴史文化」や「アート、美術館」、「人が親切」の項目では、一番大きな割合を占めたのが「どちらとも言えない」という選択肢であった。このことから、観光客は景観や自然をしまなみ観光の第一の目的とし、副次的にそれ以外の観光を楽しんでいるということが考えられる。

その他に、大三島では、大山祇神社が観光の中心となっている。大山祇神社については神社としての魅力、歴史的な面白さ、そしてパウアースポットとして認識されていることで観光客が引きつけられている。しまなみ海道については満足度、再訪問意識、伝えたい意識はともに高い。

2016年度に博士課程前期の大学院生 (許雅琦氏) を中心に観光に関わる行政機関、観光

産業関連者合計 18 箇所の聞き取り調査を行い、愛媛県側と広島県側の違いに注目した。聞き取り調査の結果、島を繋ぐ観光地域連携の課題としては、(1)滞在型観光への転換(2)インバンド観光の誘致(3)地域住民との連携の強化(4)交通手段の充実という四つの課題を明らかにした。

とびしま海道沿いの島々（広島県・呉市）について、2015 年度に観光者を対象にアンケート調査を実施し、観光協会と海道の連携を図る組織に聞き取り調査を行った。また、自転車観光のポテンシャルを測るために外国人と日本人によるモニターツアーを実施した。走ったコースの魅力としては古い町並みが保存されていること、初心者でも走りやすいサイクリングコースであること、景色と自然の美しさ、料理の良さが挙げられた。また、具体的な課題としては、英語の対応の不足、休憩する場所や商業施設の不足、レンタサイクルなど自転車の対応がないこと、交通アクセスが不便であることが挙げられた。

同じサイクリングをテーマとするしまなみ海道ととびしま海道であるが、関わる自治体がサイクリング観光をどの程度重視し、推進しているかという政策の違いが明確に現れている。また、県と市の境界を超えた広域連携が必要ないため政策がまとめやすいはずのとびしま海道は、アクセス条件が悪いこと、合併前は異なった自治体であった地域間での連携が取りにくいことが発展を遅らせていると思われる。

新しい観光と島についての検討(3): アート・ツーリズム: 直島, 小豆島(香川県) 2014 年度に直島(香川県)とその周辺の島については、ボランティアがアート・ツーリズムの役割について行政と NPO に聞き取り調査を実施し、博士課程前期の院生(張楠)を中心にボランティア・ツーリストのアンケートも実施した。2016 年度に第 3 回の瀬戸内国際芸術祭が行われた。その結果、芸術祭が開催される島において移住者が増え、観光産業に重要な役割を担っていることが報道資料や行政報告から明らかになった。そこで特に観光産業が発達している小豆島を対象に、観光協会、行政、そして移住者の聞き取り調査を行い、また、全島に渡って観光産業関連者にアンケート調査を実施した。

島に対する認識調査(全国):

WEB アンケートによる認識調査を行った。全国を対象に男女、年齢層、居住年規模別にサンプルを選出し、1500 人から回答程を得た。調査項目は旅行とレジャー思考に関する項目、「島」に関する意識と訪問経験、全国の主な島についてそのイメージ、島への訪問予定や移住検討に関する問いから構成された。調査項目の設計は研究代表者が行い、調査の実施はインターネット調査を専門とする業者を利用した。

以下は、結果の一例である:

表 1:

あなたは、これまでに、仕事以外の目的で実際に訪れたことのある「島」の数はいくつですか。(%; n=1500)

	国内の「島」	海外の「島」
1つ	19	15.1
2つ	16.1	8.9
3つ	9.1	4.7
4つ	3.1	0.9
5つ以上	11.9	4.1
「島」に行ったことはない	40.8	66.2

この回答から、国内でも仕事以外で島(北海道, 本州, 四国, 九州を除く)を訪れたことがない人が四割と高いことが分かる。

また、島に対するイメージについて、21 項目を立て、5 段階評価(5=当てはまる, 1=当てはまらない)で回答を求めた。

表 2: あなたは、国内、海外を問わず、「島」についてどのようなイメージを持っていますか。(%, n=1500, 無回答を含まない)

	5	4	3	2	1
海	34.9	43.5	15.1	3.5	1.6
自然が豊か	24.1	50.3	18.9	3.6	1.5
のんびり	18.8	53.3	20.7	3.7	1.7
観光地、リゾート	15.1	44.8	28.6	6.6	2.7
南の楽園	12.5	35.4	31.1	12.2	5.8
海水浴	12.1	40.5	29.7	10.5	4.3
独自の文化	11.9	49.1	28.5	6	1.9
癒やされる	11.9	44.3	32	6.4	2.8
生活が不便	11	40.2	31.4	11.5	3.5
独自の生態系	10.1	45	32.7	6.3	2.9
釣り	8.9	34	30.4	12.3	9.9
人の絆が強い	8.7	39.9	36.6	8.1	3.3
ロマンチック	5.6	27.9	40.9	15.7	6.2
あこがれの場所	4.5	21.1	42.7	19.3	9.1
たそがれ	4.5	27.1	42.1	15.1	6.1
エキゾチック	4.3	26.1	40.1	17.5	7.7
閉鎖的	3.5	21	37.6	24.9	9.9
懐かしい	3.4	17.9	42.7	18.8	12.1
孤独	2	12.5	40	26.8	14.6
つまらない	1.6	7.9	35.3	29	20.7

この回答からは、島のイメージが海, 自然, 観光・リゾートの要因に強く影響され、のんびりであり、癒やされるという陽性の印象が強いようである。逆に否定的なイメージが弱いことが分かる。

次に、日本の島を 32 ヶ所上げ、その知名度と訪問経験を伺った。

表 3：あなたは以下にあげる日本の「島」について、行ったこと、名前を聞いたことがありますか？（トップ 10 位,% ; n=1500）

行ったことがある	行ったことはないが行きたい	名前を聞いたことがある	名前を聞いたこともない
宮島(広島)	屋久島(鹿児島)	父島(東京)	白石島(岡山)
淡路島(兵庫)	石垣島(沖縄)	八丈島(東京都)	小値賀島(長崎)
小豆島(香川)	宮古島(沖縄)	種子島(鹿児島)	田代島(宮城)
佐渡島(新潟)	奄美大島(鹿児島)	大島(東京)	大崎上島(広島)
石垣島(沖縄)	西表島(沖縄)	対馬島(長崎)	祝島(山口)
大島(東京)	種子島(鹿児島)	佐渡島(新潟)	大久野島(広島)
宮古島(沖縄)	佐渡島(新潟)	奄美大島(鹿児島)	島後(島根)
西表島(沖縄)	八丈島(東京都)	壱岐島(長崎)	甌島列島(鹿児島)
屋久島(鹿児島)	与論島(鹿児島)	与論島(鹿児島)	答志島(三重県)
壱岐島(長崎)	小豆島(香川)	西表島(沖縄)	大三島(愛媛)

この結果を見ると、「行ったことがある」島の一位に宮島が入り、世界遺産でもある観光地は最も多くの人を引きつけている他に沖縄の島が3カ所上げられている。「行きたい島」と「名前を聞いたことがある島」には共に沖縄、鹿児島という南の島が多い。また、「名前を聞いたことがある」島にはその他に佐渡島、対馬島という、立地が独立し、面積の大きい島が上げられている。一方、瀬戸内海の島はあまり知られていない。

以上は結果の一部に留まるが、日本でも「島」のイメージは海と南という要因が重要で、世界的に共通しているイメージに近く、観光旅行の目的としても南の島は人気が高いことが分かった。

結論

本研究の結果として、観光の発展が島にもたらす影響は一方的なものではなく、島の社会的、環境的条件が観光の発展と観光におけるイノベーションに複雑に絡んでいることを明らかにした。また、持続可能な発展を目指す中で島外の行政機関、観光産業や移住者と島内ステークホルダーの利害関係が重要な鍵を握っていることが見えた。持続可能性を評価するときに、各島の状況に合わせた指標を選び、「外部」と「内部」の関係も検討することが不可欠である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- 1) Adewumi, Ifeoluwa B., Funck, Carolin “Ecotourism in Yakushima: perception of the people involved in tourism business” 地理科学(査読あり) 71-4, 2017年, 1-21.
- 2) d’Hautesserre, Anne-Marie; Funck, Carolin “Innovation in Island Ecotourism in different contexts: Yakushima (Japan) and Tahiti and its Islands” Island Studies Journal(査読あり) 11-1, 2016年, 227-244
- 3) 宮本雄介, フンク・カロリン 「宮島の観光空間における高齢者の地域貢献活動」環境科学研究(広島大学大学院総合科学研究科紀要 I I)(査読あり) 11, 2016年, 1-18
- 4) フンク・カロリン, 宮本雄介, 張楠, 「島の観光空間を維持・創生するボランティア・ツーリズムの課題」第30回日本観光研究学会全国大会学術論文集(査読なし), 2015年, 149-152
- 5) フンク・カロリン 「エコツーリズムと持続可能性」瀬戸内海(査読なし), 69, 2015年, 10-12

〔学会発表〕(計7件)

- 1) フンク・カロリン, 日本の島嶼地域における観光の持続可能性, 日本地理学会平成29年度春季学術大会, 2017年 03月28日, 筑波大学(つくば市)
- 2) Adewumi, Ifeoluwa B., Funck, Carolin, “Tourists’ Motivation and Satisfaction: Implication for Tourism Management in Yakushima Island, Japan”, International Geographical Congress 2016 Pre-Conference Meeting, 2016年8月18日, 南京(中国)
- 3) Funck, Carolin, “Empowering tourists and/or destinations? Dilemmas of ‘new’ forms of tourism”, Mini-Conference: Civil Society, Tourism, Anthropology British Association for Japanese Studies, 2016年07月30日, 北海道大学(札幌市) キーノート(招待)
- 4) フンク・カロリン, 島の観光空間を維持・創生するボランティア・ツーリズムの課題, 第30回日本観光研究学会全国大会, 2015年11月29日, 高崎経済大学(高崎市)
- 5) フンク・カロリン, しまなみ海道の新しい観光, 日本地理学会秋学術大会研究グループ例会, 2015年9月19日, 愛媛大学(松山市)
- 6) Funck, Carolin, “The role of volunteers in the management of tourism spaces and experience: examples from Germany and Japan”, EUGEO, 2015年8月31日, Budapest(Hungary)
- 7) Funck, Carolin, “Chances and problems of development based on art tourism: from

the example of Naoshima” , International Geographical Union IGU Commission on Tourism, Leisure and Global Change Pre-Conference Symposium, 2014 年 8 月 15 日, Poland

〔図書〕(計 1 件)

1)藤田陽子,渡久地健,かりまたしげひさ(編)
「島嶼地域の新たな展望」,九州大学出版,
フンク・カロリン「第 3 章 島おこしと観光
「観光地」と「生活空間」の両立は可能か
」,(査読なし)2014 年, 57-71

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

フンク カロリン (Funck Carolin)

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号:70271400

(4)研究協力者

アデウミ イフォルワ ボランレ

(Adewumi Ifeoluwa Bolanle)

広島大学・総合科学研究科博士課程後期・院
生